

II 特別連載 II

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第300回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は早稲田大学と静岡県が実施したプログラムを紹介する。

早稲田大学の活動報告



浅田 匡
(早稲田大学
人間科学学術院教授)

オンラインによる国際交流のススメ

2021年度はコロナ禍の影響のため、招へいプログラムの変更を含め、3回のオンラインによるプログラムを実施した。交流校は、フィリピンのモンテインルバ市立大学(CDM)およびタイのパンヤルピット経営学院(PIM)。オンラインでは施設等の見学は制約があるため、プロジェクト型の学習交流プログラムを実施した。CDMは工学部だけの単科大学であり、早稲田大学人間科学部との交流は学際的な課題が必要であったため、「科学技術は人間を幸せにするか?」をテーマとした。また、PIMとの交流は2回行ったが、1つは「多様性とインクルーシブ」をテーマに、主に



プレゼン後の記念撮影(PIMとの交流)

「科学技術は人間を幸せにするか?」をテーマとした。また、PIMとの交流は2回行ったが、1つは「多様性とインクルーシブ」をテーマに、主に

して経営学部との交流を行い、あと1つは「食の安全と環境問題の解決への科学技術の活用」をテーマとした。

① 交流活動の特徴

3つのプログラムに共通する特徴は、プロジェクト型の学習交流である。学習を成立させるために、課題の設定、具体的な事例を含めた講義、文献紹介、グループによるケース・スタディ、学習成果の発表というプロセスを構成した。例えば、CDMとの交流では「科学技術は人を幸せにするか?」を課題とし、歩行の研究と高齢化の問題解決に関する講演とユニバーサルデザインを含め高齢者がアクセスできるデザインのあり方についての講演。Positive computing をCDMの学生が発表し、「アート思考とものづくり」については早稲田の学生が発表し、それらを踏まえて5グループ別にそれぞれの国でのケースを取り上げ分析し、その成果を発表した。この一連のプロセスでは「どのような役割分担を行い協力していくのか」といった協働の意義を学生が経験していることも特徴である。グループ活動を円滑に進めるために、TAの果たす役割は大きかった。ネット上での協働を支援するソフトウェアの紹介、多様な視点の提供や心理的な支援などが主な役割であった。プロジェクト型の国際交流プログラムでは、課題設定に始まる学習プロセスの構成と、それを支えるTAの活用が不可欠であることが実感された。

② プログラムの成果

3つのプログラムとも参加者の評価は高かった。それぞれの学生の専門と関連づけた課題設定あるいはプロジェクト設定を行ったことよって、参加した大学教員からは今後の学習や仕事の選択に関して、より学際的な視点から考えられることが期待されること、また国際分野への視野の広がり期待されることといったコメントがあった。

CDMとはプログラムの実施から箇所間協定の締結へと展開し、2022年度は招へいプログラムの申請に至った。また、PIMとは既に箇所間協定を結び、学生間の交流を行ってきたが、PIMの附属高校の生徒からの参加要望もあり、交流が高大連携へと広がっている。参加した高校生からは日本への留学希望者も出てきている。さらに、テーマの1つにDiversity Managementを取り上げたこともあり、日系企業もしくは日本での就職を考える学生が出てきたことは、これまでの交